



TITLE:

# ロリヤの見たる世界恐慌原因

AUTHOR(S):

松岡, 孝兒

---

CITATION:

松岡, 孝兒. ロリヤの見たる世界恐慌原因. 經濟論叢 1933, 37(1): 145-152

ISSUE DATE:

1933-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130327>

RIGHT:

# 京都市大學經濟學會 經濟論叢

第一號

第三十七卷

昭和八年七月一日發行

## 論叢

經濟政策の根本義……………法學博士神戸正雄  
資本形成の自動性について……………文學博士高田保馬  
經濟本質論……………經濟學博士石川興二

## 時論

我が國インフレーションの特質……………經濟學博士小島昌太郎  
現在の

日滿農業收益の比較と我が農業移民……………經濟學士八木芳之助

## 研究

勘定學說に就いて……………經濟學士蜷川虎三  
資本蓄積論……………經濟學士柴田敬

## 說苑

不況時<sup>に於ける</sup>中小企業の適應能力……………經濟學士大塚一朗  
ロリヤの觀たる世界恐慌原因……………經濟學士松岡孝兒

## 附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

（禁轉載）

## ロリヤの見たる世界

### 恐慌原因

松岡孝兒

#### 一

ひとも知る如く、資本主義制經濟の歴史的發展に於ける景氣變動の機構への見解には、専ら之をその流通關係を通じて取扱ふものと、生産關係を通じて取扱ふものとの對蹠的な存在がある。此の事情は特に其の謂はゆる長期的變動の峯又は谷に當る時代に於いて、最も明瞭に觀取されるやうである。

かくの如き點から考へられた恐慌が、果して如何なる内容に於いて示され來つたかは、これ亦已に多くの見解の存在するところである。併し恐慌を單なる恐慌現象として取扱はず、廣く景氣變動上の一現象とする立場から取扱ふ限りに於いては、その内容が物價騰貴停止 (Arrêt de la hausse des prix) にあることは、彼のジュグラル (Juglar) が夙にこれを其の著商業恐慌

論に於いて稱へてより、廣く一般に認められてゐるところである。<sup>2)</sup>

今日の世界恐慌も此の點よりして前述せる點に對する例外をなすものでない。これを事實について見ても、一九二九年七月に引續く十九ヶ月間に、物價は日本及印度に於いて二七バアセント、イギリスに於いて二四バアセント、オオストラリヤに於いて二三バアセント、フランス、イタリヤ、北米合衆國及びカナダに於いて夫と二〇バアセントを示してゐるといはれてゐるが如き、正に之を立證するものである。<sup>3)</sup> かくて景氣對策の多くが、其の窮極に於いて、常に一種の物價引上を問題としてゐることも、亦その事實を裏書するものと謂つていい。そして此の見方は、更に惹いて物價をば一定標準年度に立歸らしめることを目的とする政策、謂はゆるリフレエション政策なるものの採用を根據づけるに至るものである。<sup>4)</sup>

併し、此の物價下落なるものは、果して如何なる原因によるものであるか？ 従つて之に對して如何なる

對策が行はれたか？ その結果また如何なる見方が行はれるべからざるか？ 本稿は此等の點に關してイタリヤの經濟學者アキレ・ロリヤ(Achille Loria)の語るところを簡單に紹介せんとするものである。<sup>5)</sup>

今日廣くインフレエションは、あらゆる意味に於いて世界恐慌への對策として論議され、それに關する研究報告乃至著書はまことに汗牛充棟もただならない。併し此等の殆んど總ては、今日の經濟社會が如何なる經濟社會にあるかについての認識が不明であり、またたとひそれへの考慮があつても、その對策たるインフレエションそれ自體が、この經濟社會の全體的なるものの表在的現象にすぎないものであることを明確に認識し、評價せるものに至つては極めて少い。此の點よりしてここにロリヤの見解を紹介することは、一の意義を有つと信ずるものである。

## 二

上述せる如く、世界恐慌の特性が、物價下落現象にあるとして、然らばその原因は果して如何なるもので

- 1) Juglar: Des crises commerciales et de leur retour périodique en France, en Angleterre et aux Etats-Unis,
- 2) 拙譯：景氣豫測法の研究 pp. 16-17.
- 3) S. D. N.: Annuaire statistique de la Société des Nations, 1931, pp. 270-273. 尙ほ又この事實について、更に立入つて云へば、物價に對し生産費が下落しないといふことが注目さるべきである。ポオレエによれば、1924年より1929

あるか？この問題への答解は、已に今日極めて多數に上つてゐる。従つて今一々之をあげるとはそのところでない。唯ロリヤの見解を紹介する關係に於いてその主張するところをあげると、大體彼は此の原因を二つの方面に分つてゐる。一は即ち流通的方面に於ける原因であり、二は即ち生産的方面に於ける原因である。そして彼はまづ流通的即ち貨幣乃至信用的立場から此の問題の分析にはいり込んでゐる。然らば更に立入つて、謂ふところの流通的原因中貨幣的原因とは如何なるものであるか？又信用的原因とは如何なるものであるか？更にまた總じてかくの如き立場は、廣く恐慌原因研究の立場よりして如何なる見方であるのか？我々は暫くロリヤの語るところに聽かう。

先づ第一に貨幣的立場については、謂はゆる金缺乏論者の主張をあげてゐる。其の主たるものがカッセル(Cassel)であることは周知の如くである。

カッセルの考へをロリヤは次の如くに謂ふ。<sup>6)</sup>金の生産は商品に於ける取引量の増加に對して伴ふことを得

ロリヤの見たる世界恐慌原因

ないと。この考へに於いて國際聯盟財政委員會による金委員會は、その金缺乏が一九三四年に於いて起ると謂ひ、かくの如き金の缺乏は、米佛の如き優越なる債權國をして金の獨占を生ぜしめるに至つたと。また事實一九二五年より一九二八年に亘り、此等二國は五億三千八百萬金ドルを吸収せるものであり、この額は同期間の金生産分量よりも多く、この傾向は其後更に發展して、一九三一年に於ける此等兩國の金在高を、世界金總在高の七四・五パーセントにまで達せしめてゐるが、このことこそはまた謂はゆる金に關する古典理論の國際的無力を示せるものであると。

ロリヤによれば、かくの如く、金缺乏なる點に恐慌原因を認めたる見方に對して、恐慌原因をば銀行によつて與へられた信用不足にあると論する人々があるといつてゐるが、これ即ち恐慌原因をば信用的立場から述べた人々であり、ハアン(Hahn)、ロバートソン(Robertson)及びケインズ(Keynes)の如きこれに屬する。

ロリヤは尙ほ語つて次の如くに謂ふ。

第三十七卷 一四七 第一號 一四七

年に亘り、物價指數は8パーセント下落したるに對し、勞賃は僅か1パーセントの下落を示したにすぎないといはれる。

4) 例へば最近に於いては Agenda of the World's monetary and Economic Conference の如き

5) Loria, Achille: La superstition monétaire (Revue Economique Internationale, Fév. 1933. pp. 227-238)

先づハアンは、地金の流通せる場合に於いては、信用は金準備への一定限界を越えては發展し得ないが、銀行通貨の場合に於いては、信用がむしろ資本の實際の創造者となると謂ふ。

更に又ロバアトソンの謂ふところとして、ロリヤののべるところによれば、信用によるインフレーションは、二つの作用をなす。その一は物價引上により、貨幣所有者をして、不生産的消費を轉じて貯蓄に向はしめるものであり、その二は、更にインフレーションによつて造り出された貨幣は、その所有者に貯蓄手段を與へるものであるといふ。かくて信用は、此等二方面より貯蓄を培ふものであり、今日世を擧げて苦しむ物價下落なるものは、全くこの信用が個人の必要としてゐる需要に彈力的に應じ得ないといふ事實に依據する。そしてかくの如きは、今日、銀行の信用授與が極めて狭い範圍に限られてゐるからであり、かくて生産的事業の自然的發展は妨げられるに至つてゐると謂ふ。最後にロリヤはケインズによつて謂ふ、銀行は金本

位制度への復歸によつて、事實上金利をば極めて高く引上げしめるものであり、此の如き高金利は貸付資本を減ぜしめ、更に之によつて物價低落を生ぜしめるものであると。

### 三

ロリヤが流通的方面の原因として、即ち貨幣乃至信用方面に於ける原因としてあげたるものは以上の如くである。然らば其の對策は如何なるものであるか？先づ貨幣的立場に於ける對策から述べやう。

第一に金缺乏に關する對策としては、法定準備率の低下が要求されてゐる。之に於いて一般に金地金制度が採用され、金貨兌換は行はれなくなる。また發行準備と發行額との間に於ける一定割合の維持も、その重要性を失ひ、發券銀行準備は對外支拂に於いてのみ重要となる。ロリヤは此の對策を以つて、妥當を缺くとなす。蓋し發行準備と發行額との間に一定の割合が存せざるに於いては、發行額は遂にこれが發行に對する標準乃至限界を失ふに至り、遂には貨幣價值の下落とな

6) Loria, A.: op. cit. p. 229. et s.  
7) Loria, A.: op. cit. p. 230.  
8) Loria, A.: op. cit. pp. 230-231  
9) Loria, A.: op. cit. p. 231.  
10) Loria, A.: op. cit. pp. 229-230.

り、それはまたひいて金準備を減少せしめるからである。

大戰後に於いては、此の金準備に對し、金爲替準備を以つて之に代へ、これによつて金節約の實をあげんとする方法が採用された。ロリヤは之に對しても謂ふ<sup>11)</sup>、かくの如き制度は、金爲替を取扱つてゐる國が、その取扱を停止せる場合に於いて、金爲替準備に急劇な變化を生ぜしめると。

尙ほまた同一の目的に於いて、銀行紙幣に對し小切手を以つて代用する方法が採用された。ロリヤはこれについても、それは小切手の盛んに流通する國に於いては適當かもしれないが、然らざる國例へばドイツの如きに於いては之によつて齎らされる實益は比較的少いと考へてゐる。<sup>12)</sup>

最後に當座預金を定期預金に準じて取扱はんとする方法が考へられてゐるが、これによれば當座預金には本來ある程度長期資金性が存するものであり、従つてこれに對しては小額の準備を以つて足りるとするものである、と彼れロリヤは謂ふ。<sup>13)</sup>

ロリヤの見たる世界恐慌原因

以上、金準備の不足に關する對策は、それ自體廣義には貨幣的手段の缺乏對策であることは明かである。總じてそれは後に於いて論する如く、一種のインフレーション説を生ぜしめる。

然らば信用的立場に於ける恐慌對策は如何？ その主要なるものはこれ亦一のインフレーション政策である。然るにインフレーションなるものは、元來これによつて増發された貨幣を貯蓄するものではなく、反つてこれを消費するものであり、それは當然に從來の貨幣所有者をして、その購買力の一部を放棄せしめるものである。

かくて等しく信用的立場に立つも、その見方は必ずしも同一でない。ロリヤは之を説明して、<sup>14)</sup>物價下落は市場に對して生産費に相當する通貨量を投じないからであるが、更にまた價格には利潤をも含んでゐるから、この點よりして今日の市場には、利潤獲得のために必要な通貨量を存せしむべきであり、恐慌の眞の原因は正にここに存するといひ、また、物價下落は單に貨幣

- 11) Loria, A.: op. cit. p. 230.  
12) Loria, A.: op. cit. p. 230.  
13) Loria, A.: op. cit. p. 230.  
14) Loria, A.: op. cit. pp. 231-232.

量のみによるものではないとして、例へばホオトレエ (Hawley) は、景氣變動は貨幣のみならず、信用の變動によると謂ひ、ハイエク (Hayek) は、恐慌は貨幣的諸原因の結果であると論じ、ハントス (Hantos) は、専ら社會の衰退より起る貨幣的無秩序であると謂ふ。

#### 四

以上の如く不況對策をば、單なる抽象的方面からのみ見ず、更にその具體性に於いて主張せるものとして、ロシアはかのフィッシャー (Fisher) の補正ドル案を擧げ、更に之と並稱されるものとして、ハイエクの中立貨幣案を述べてゐるが、此等の案は等しくその實踐に於いて論議されたにも拘らず、その實質に於いては依然として抽象への過重視なる非難をまぬがれ得ないと批判してゐる。<sup>15)</sup>

此等の主張を更に進めた人々に於いて、問題は益々迂路にはいり込んでゆく。ロシアは之を一括して次の如くに謂ふ。<sup>16)</sup> 例へばある論者は、商品の販路擴張のため國家は生産者に對して、その生産物價格の引下を條

件として、その希望する分量の紙幣を無償にて給付すべきことを論じてゐると述べ、これに對し、あらゆる生産物は元來その價格の低廉なるに於いて買手を見出すものであるから、無償にて生産者に與へられる紙幣は遂に何物をも購買することを得ぬだらうと述べてゐる。又他の論者によれば、預金が流通に投ぜられるためには、銀行はその預金に對する利子の引下または利子の放棄を要求してゐると謂ひ、更に又他の論者によれば銀行は大いに消費者に貸付け、これによつて消費の増加をはかるべきであると論じてゐる。更にまた他の論者は、貿易に於いて輸出すべき商品を有せず、従つてその輸入に對しては金の流出を行はなければならぬ國に向つてこそ、それへの商品輸出は行はれなければならないといふが、ロシアはかくの如きはまた一の重商主義的思想の再生産であると謂ふ。

此の種の考へに於いて注目すべきものとして、ロシアは更にケムブリッジ學派諸教授の管理通貨の思想をあげてゐる。<sup>17)</sup> 之に於いて最も人口に膾炙せるものとしては、ケインズの通貨論、特にマクミラン委員會の

15) Loria, A.: op. cit. pp. 232-233

16) Loria, A.: op. cit. p. 233.

17) Loria, A.: op. cit. pp. 233-234



報告に現はれたインフレーション論であるが、尙ほ又  
パタアソン (Patteson) は、そのデフレーションに對し  
て一定の期限を附加することが必要であると論じ、ス  
トロング (Strong) は聯邦準備銀行の物價安定策への出  
動を主張してゐる。

最後にロリヤはかくの如き對策を批判して次の如く  
謂ふ。<sup>18)</sup>

之を要するに、各國の不況は以上の如き主張にも拘  
らず、その何れに於いても根本的の打開を示し得ざる  
ことは、周知の如くである。特に恐慌が、世界大戰後、  
大部分の諸強國が、その貨幣價值を安定せしめた後に  
於いて起つたことは、益々以つて流通的方面よりする  
世界不況の把握が、皮相的なものであることを認めな  
ければならない。事實アメリカが、全世界にその影響  
を及ぼせる恐慌を勃發せしめたのは、一九二九年、英、  
獨、澳、白、日、伊、佛等がその貨幣價值を安定せし  
めた後に於いてである。

かくて最近、かくの如き示唆によつて稱へられた結  
論は、今日の物價下落從つては恐慌の原因は、之を貨  
幣的事實に、即ち眩惑的な表在的事實に求めてはいけ

ロリヤの見たる世界恐慌原因

ないといふことである。注目すべきは富の生産並に分  
配諸關係の最も深き諸層への關心といふこと即ちこれ  
である。そは無視された生産諸層への深められた研究  
であるべきであり、かくれたる社會を動かす原因への  
新しき研究でなければならぬ。

このことはまた當に今日の恐慌諸原因の認識を妥當  
ならしめるのみではない。そはまた同時に、現段階的  
恐慌に對する豫防、治療、回復を示す方法を教へるも  
のでなければならぬ。此の意味に於いて、恐慌脱出  
の残された方法は、貨幣をまたは紙幣をつくり出すこ  
とそれ自體よりも、むしろ産業諸關係根據への本質的  
吟味特には土地所有權に關する根據への根本的打開で  
あることを知らしめるにありといふべきである。

## 五

以上之を要するに、ロリヤの謂はんとするところは  
さきに述べたるが如く、世界恐慌原因及び對策を、生  
産的立場に於いて考察すべしとするものであり、その  
限りに於いて、流通的即ち貨幣的乃至信用的立場を輕  
視せんとするものである。併し、そはあくまでも相對  
的に認められるといふに止まり、かくの如き流通的立

場をば無用視せんとするものではない。

ロリヤは此の點に於いて、一の興味ある例を引いてゐる。それに於いて彼は謂ふ。「貨幣は若干の點に於いて肝臓に比較される。事實我々が健康な時には、肝臓の存在は理解されないが、その不健全な時に於いては健康は屢々危機に瀕する。貨幣も亦同様、その正常状態に於いて存する時は、貨幣制度は恰も存在せざるが如くに作用してゐるが、貨幣状態にして何等かの變化を來すときは、全經濟諸關係は不均衡となる」<sup>19)</sup>と。

是れ即ち彼の肝臓説——從來一般には心臟があげられてゐるのに對し——であるが、彼は世界大戰間の如き、貨幣状態が良好ならざる場合には、上述せる意味に於いて、恐慌原因の重要性は之を貨幣に認めることは尙ほ恕すべしであるが、貨幣が安定せる後の現象、即ち貨幣の動搖が止つた後に於いても、尙ほ之を以てその不安現象を説明し得るものとはいひ得ないと謂ふ。要するにロリヤの考へは、流通方面より見たる恐慌原因乃至對策は、今日の如き事情に於ける恐慌の原因乃至對策を究明する見方として、妥當を缺くと考へるものであり、かくて恐慌の原因乃至對策は、資本主

義制經濟の實際に即し、之を現段階的に把握するかぎり、生産的立場によるべしといふにある。

例言すれば、ロリヤの企圖する世界恐慌原因の見方は、今日多くの人々の立場が、あまりにメルカンテリスト乃至ネオ・メルカンテリスト的なるに對し、これをばフイジオクラットの立場に於いて理解し、批判せんとするものであらう。

ゲーテはそのファウストに於けるマフィストフェレスをして謂はしめる。「鋤と鍬とをとれ、そして掘返せ。農業勞働は汝をして偉大ならしめ、金の犢の群はその地中より掘出されん」<sup>20)</sup>と。この言葉はまた正にロリヤが「金を忘れよ、そして土に注意せよ。そは社會的不均衡の諸原因へのあらゆる研究者の主張となるべき言葉でなければならぬ」<sup>21)</sup>といふ主張に照應するものである。

我々は急迫せる今日の經濟恐慌を把握するに際し、このロリヤによつて示された含蓄的なるもの全體的なるものへの省察を重ねべきである。そしてその解明的なるものに於いて、その實際的なるもの、具體的なるものへの關心を深むべきである。

19) Loria, A.: op. cit. p. 228.  
20) Goethe: Faust, Teil II, S. 49 (Trendenburg)  
21) Loria, A.: op. cit. p. 238.